

## <資料> 平成 24 年度 講演記録

### 第 58 回 幼児教育研究会 平成 24 年 6 月 10 日（土） 講演 『これから求められる幼児期の教育』

本日、「これから求められる幼児期の教育」というテーマをいただきました。しかし今大変幼児期の教育・保育の世界は揺れ動いておりまして、どこを焦点にしてお話をしたらいいか大変悩んだ次第です。今日レジメを用意しましたので、レジメに沿って話をしながら今日の保育や研究発表も交えてお話しさせていただきます。今日一日、本当に充実した研究会だったという実感をもっています。ここにいらっしゃる先生方一人一人も感じていると思います。あいにくの雨で園の先生方にとっては、今までの園生活と今日の保育という中で大変迷いも多かったと思います。私も 20 年間附属幼稚園にいまして年に 1 回は必ず研究保育をしていまして、これまでに 20 回はやってきました。今日は雨の日の案も立てていただいています。雨によって、新しい遊びの流れができるかもしれません、公開になると緊張しますよね。園の先生は外でのダイナミックな子ども達の遊びを見てほしいという思いがあったと思うのですが、逆に一人一人はすごくよく見えたというのが実感です。一人一人の育ちといいますか、3 歳らしい生活があり、4 歳らしい遊びの姿があり、5 歳らしい活動の姿があったと実感しています。確かに、活動は中の遊びと外の遊びで内容は違います。しかし、そこで育ってきていることは変わりません。今回のテーマである「自分づくりを支える保育」、自分づくりという 3 歳なりの姿、4 歳なりの姿、5 歳なりの姿を通してしっかりと見ていらっしゃることがすごく伝わってきたなと思います。

今日は 4、3、5 歳と順に見せてもらいました。まず、4 歳の部屋に行きますと拠点となる場があり、そこを拠点に忍者遊びが行われていました。隣では積み木で囲いをつくり、その上に布ベッドをつくっているんですね。全く材質は違い、一方はマルチパネで、プラスチックでカチカチとつくられているのです。そのわきになぜベッドが存在するのだろうと思いました。そこ

東京成徳大学

神長美津子先生

には一人の女の子がずっと座り、お人形さんがそこで寝ていて、時々もう一人の女の子が帰ってくるわけですね。その場にいる子に対してはマルチパネで遊んでいる子は時々「ダメ」など言うのですが、その隣にくついている子には何も言わないんですね。これはもしかすると仲間のかなと思いました。子ども達は仲間という意識はないでしょうけど、一緒にいるということを互いに認め合っているのだろうと思います。4 歳ってすごく気にいった場や友達、遊びをくり返すんですよね。それでいて共通の目的っていうものをそれほど一緒にいる友達に求めてこないという、つながり方があり、それがすごく保障されているなと思いました。4 歳の発達をしっかりとらえて遊びが展開されていました。

そして、3 歳に行きますと一人一人がバラバラに見えて、不思議ですよね。一応机の周りに 5、6 人が集まっていて先生がそこにいて、会話をしながら何かやっているのでつながりが見えてもいいようだが、本当にバラバラに見えてくるんですよね。セロテープを使いたいと思った女の子がセロハンテープが目の前にある女の子に近づいて黙って手を出すんですね。大人の私から見ると、明らかにこの子はテープを使いたいんだなと思うのですが、セロテープが目の前にあってかつて使っていたであろう女の子がじろっと睨むんです。手を出した子はすぐに手をひっこめるんです。そうすると「先生」って先生の顔見て、先生の方に「助けてちょうだい」というようなサインを送るわけです。そういうやりとりを見ていると 3 歳らしいコミュニケーションのかわし方をしているなと思います。「必要なことは言葉で言うのよ」という指導は私達もしていますし、「入れてとか貸してっていうのよ」ということは気づいたら伝えます。しかし、初めて集団生活に入ってまだ、2 カ月たたない子ども達が人とやりとりをするときには壁を

感じるんですね。その体験はすごく大事で家庭では絶対に味わえないものです。少子化という中で大人に守られながら生活している子ども達は「水」と言うと「はい、水が欲しいのね」ってちゃんと大人は分かってくれるわけです。じろっと睨まれて自分がすくんだという経験はこれからコミュニケーション力を身につけていく中でバネになつたらいいなという体験の一つです。そうかと思えば、3歳のテラスで遊んでいる男の子が、段ボール箱の中に入つて遊びを楽しむんですね。もう一つの段ボール箱の中に自分がつくった工作物、もしかしたら武器と言われるものをそつと隠してました。誰かが入ろうとすると引きずり出すんですね。「ダメー」「入っちゃダメ」と言うのですが、「なぜだめか」とか「どうしてほしいか」ということは一切言わず、「ダメ」と言って引きずり出していました。あきらめてその子はどこかに行きました。すると別な子が同じように組み立てた小さなブロックをもつてきて、ジュースのようにブロックを見立てました。すると中に入つていた子が自分のだと言つてトラブルになるのです。要するに余計な者が来た、自分の所を守ろうというようなところだと思います。その子は「ダメ」「俺のだ」という言い方をしていました。言い合いやりとりをしながらやつてきた動作で何かを注ぐような真似をしています。そうする動きが伝わっていきました。見立てが伝わった、イメージが伝わった瞬間なのです。そしたら「ダメ」「俺のだ」という言い方が変わって、赤いブロックをその子が渡したのです。4歳の同じような遊びをしながら群れている姿と3歳の同じ場にいながら全く思いがバラバラ、言葉が伝わっていないか、それでも自分の領分を守りたいという姿は違うなと思いました。

その帰りにターザンロープに並ぶ4歳の姿がありました。いわゆる挑戦する遊び方が発展しているものです。3歳と4歳では遊びの種類や友達とのコミュニケーションのかわし方、自分の思いの表現の仕方など違いを感じました。

5歳の方に行きますと、後半でした。自分達の遊びというか一つの活動を繰り広げていく、なんかそういう力強さを感じました。私はコミ

ュニケーションや伝え合う力にとても興味をもつっていましたので、片付けの場面を見ました。例えば梯子をかたづける場面で、先生が「それは最後ね」という言い方を子供の頭を通り過ぎるように言うわけですね。それが、いいとか悪いとかいうわけではなくて、保育ってそういうことがありますよね。みんなに声をかけてこれをこうするのよと伝えて、どのくらい伝わっていくのだろうかと思うのです。三十数人いるので、そのことが伝わるのかなと思って見ていました。一人の子が持ち上げようとしたが、緑の板と梯子の片方が外れなかつたのです。もう一人の子がそれを見ていて、もどかしく思ったんでしょう。「それはこうしたらしいんだよ」と言って自分で真っすぐ上に持ち上げました。力で持ち上げようとしてもだめなんでしたが、すうっと上にあげるとポコッと外れました。すると、「あっ。そうか」というやりとりが言葉ではなく動きでかわされ「あっ、そうか」という了解をするわけです。でも、先生は最後と言つたので、その場では持ち運ばないんです。しばらくしてその子は戻ってきて持ち上げて運ぼうとするんです。2人で運ぼうとすると、他の子がどつかから飛んできて4人で運ぶんですね。先生は最後の最後と思ったかも知れませんが、4人で運ぶということが先生の指示なしで「これは最後だよ」というだけ伝わっていくのだなを思うと、3歳のじつと睨んで「誰って」いう目で知らせる、先生助けてと大人に力を求める姿と比べると、すごい育っているなということを思います。何をしてたかというよりは子どもの心の育ちがしっかりと保障された保育なんだなということを実感しました。そういう意味で、私は雨が降つてよかったですなと思いました。しっかりと子ども一人一人が育つていたなということを思いました。私は保育園も幼稚園も子どものための施設ですから、子どもの時間が保障されることが大事なんだと思うのです。「子どもの時間」というものは短い時間でしたが、保障されていました。もう一つ、かたづけ後の一連の流れを見ていて、毎日の繰り返しの、洋服を取り換えるとかイスに座つておやつをいただく、帰りの準備をして話し合いをして帰るとい

う一連の流れについてです。3、4、5歳と見ていて、話し合いの場面は5歳しかなかったのですが、やっぱりそこは3歳、4歳、5歳の時間のとり方とか場の使い方という保育の工夫がありました。輪がしっかりとできて繰り返しの中で定着していくいいなと思います。面白いなと思ったのは椅子の置き方です。3歳は中心に向いて椅子が内側になっているのですが、4歳はどちらのクラスも外側に向かって椅子が置かれているんですね。5歳はまた内側に向かって椅子が置かれているんです。見ていて子どもの動きとして無理のない動き方で3歳、4歳の違いが面白いのと、5歳では戻るんだ、戻っても3歳とは違うんだということが分かりました。

3歳の場合には、結構お着替えなどは先生が手伝ってあげるとか「頑張って」と声をかける場面がたくさんありましたし、2人の先生は円の中に入りながら入れ替わり立ち替わり子ども達に言葉をかけたり手伝ったりしています。4歳になると自分でかごをもってきて外回りに向かって椅子が置いてあるので個々のスペースが確保される置き方になっていました。5歳になると、そういうスペースが確保されていないから遅れてしまう子はいますが、多くの子はそんなに個のスペースを確保しなくてもお着替えはできるんだなということを思いました。こんなところまで日々の繰り返しの中で定着している背景には、非常に物的な環境といいますか、空間的な環境をすごく配慮されているなと思った次第です。ちょっとしたことですが、やっぱり何を子ども達に願うかという時に配慮する必要があることなんですね。

最後に、分科会です。本当は全部回りましたが、5歳の話し合いに参加しました。非常に活発に話し合いがなされていて、参加されて皆さんのが「私だったらこうするのに」という意見を述べながら参加されていますし、それに対してなぜそうしなかったのかということを担任の先生が答えられていました。そういうところに研究会として非常に充実した研究会になったなと思います。私も附属にいた時にいろんな研修に参加しました。附属の研修会は保育を提供するということが一つのきっかけとなり、

中身の濃い研修であると思いました。また参加する側としても自分の保育に照らし合わせながら考えができるいい研修会だなど今日一日参加する中で思いました。

それではレジュメに移ります。「これから求められる幼児期の教育」というテーマで、今日参加された中には保育園や幼稚園、小学校の先生もいらっしゃるということですので、そういう意味ではこれから幼児期の教育ってどんなものなんだろうと関心をもって、参加された方も多いと思います。はじめに「子ども子育て新システム」についてです。幼稚園と保育園がどういう風に一体化しているかというところが一番の関心もとで、その時にこれからの小学校との接続が大きく課題となっているということなんですね。「総合子ども園」に関しては来週が山だといわれています。大きな流れから言いますと、一体化の流れというのも長年のねらいなのかなと思います。幼稚園と保育園というものが別々にあるというよりは、就学前の子ども達の生活を、学習を、保証するという意味では、一体化する一つの流れができると思っています。しかし、どうしていくかについては非常にいろんな苦労があるという状態です。だいぶ前ですが、私が文科省にいた時は、幼保一体化という、ちょうど預かり保育が幼稚園で始まった時代でした。預かり保育が始まること自体にとても反感の流れがあり、幼稚園をどうするつもりだというような意見が出ていました。今は公立と私立を合わせて80%ぐらいが実施していますし、私立では90%ぐらいが実施しているという現状です。十数年前に比べると、預かり保育が始まってという流れで、大きく舵が切られたこともあります。当時、歴史を調べていくと、昭和50年代、総務省の調べの中で国民の50数%は一体化を望んでいました。幼稚園の先生からではなく国民の言い方で、一体化を考えいかなければならないと言われました。そういう意味で、私達、保育園や幼稚園の関係者と一般の人達の考え方を開きがあることが課題であり、今回の流れは複雑で、賛成をする人もいれば反対を共鳴する人もいればということです。大きな流れの中で一つ課題になっていることは

幼児期の教育ということについてなかなか共通の理解が得られていないというところが一体化していった時に一つの問題になってしまうのではないかということです。幼稚園の考えている幼児期の教育と保育園の考えて行ってきた幼児期の教育には違いがあり、また一般の人が望んでいるものとも違いがあります。何をここで育っていけばよいのかということについてなかなかまとまっているという現状が確かにあります。平成13年に幼児教育振興プログラムが、幼稚園のパンフレットをつくりました。そこで「幼稚園は子どもが初めて出会う学校です」というキャッチフレーズでパンフレットを出した時に、幼稚園の方々からそんなことを言っていいんですかと、これまでの幼児教育と違うんじゃないかというようなことを言われました。むしろ、私達というか当事者は、学校教育であり、学校教育法に基づいて教育を行っていますと強調していかないと幼児教育は危ないと思っていました。当時は平成元年の教育改定の時ということで小学校以降の教育にむけて、生活や学習の基盤をつくっていくのは幼稚園教育であるということには教育要領の中には一度も触れていませんでした。平成10年になって初めて小学校教育の基盤をつくるところなんだということが教育要領の中に明記され、平成18年の学校教育法の中に幼児教育が学習の基盤ということが明記されました。その中間なので、幼稚園の行っている教育が学校教育であるということについてまだまだ抵抗感をもって聞いていらっしゃる方いらっしゃると思います。それは学校教育という捉え方に少し重さがあるのかなと思います。これは、いわゆる学校教育全体に課せられているものなのかと思います。学校教育は今の子ども達の成長に合わせ、時代を見据えながら全体が流れ動き学校教育改革がおこなわれています。そういう流れを軸にしながら、学校って相変わらず黒板を背にしながら先生が話し、子ども達は教科書を開いてノートをとっている姿が大変多いです。しかし低学年の教育はここ何年かの間に先生方の教材研究や授業研究が進んできています。しかし、そういう実情が残念ながら幼稚園や小学校に伝わってきていで

すし、一般の方々にも伝わっていない時代だったと思います。遊びを通しての総合的な指導と教科の学習にすごい隔たりがあるのに、学校というとテーマをもって学習しないといけないみたいに捉えられたのだと思います。そんな流れの中で総合子ども園ができるのです。しかし幼児期の教育、特に学校教育としての幼児期の教育についてどうしていかなければいけないのか。今日の「自分づくりを支える保育」も一つの問題提起だと思います。先ほど発表にあつた自分づくりの姿、自分づくりを支える環境の構成や教師の援助、特に自分づくりの姿といった時、何を言おうとしているのかなということがまさに学校教育の始まりとして大事なことをここで積み上げていきましょうということを3歳、4歳、5歳の中で示していると思います。研究の最後の課題の所に小学校とのつながりを考えていきたいというようなことがありました。今後ではなく、やはり始めからしているものと思って、これは大事な視点だと思って見ておりました。つまり、1年生という枠があった時に5歳の後半から1年生、いわゆる接続期に出てくる言葉としては、「人とかかわって学ぶことが楽しい」「集団生活の中で」ということになると思います。人とかかわって学ぶことが楽しいと感じられるということが自分づくりの姿を支えようとしていく中で子ども達が学習する、自分達の世界を広げていく、そういうことが楽しいと感じられるようになっていく、まさに協同的な学び、学び合いになっていくのです。そういう姿を描いた時の自分づくりの姿なのかなと思います。問題提起を受けながら、私達は幼稚園、保育園の中で、特に3歳以上は総合子ども園においても学校教育を行うんだということになっています。それは幼稚園であっても、保育園であっても、総合子ども園であっても、同じように学校教育ですから同じように提供していくわけですね。同じように提供していく時に課題となることは、3歳から集団生活がスタートする子ども達の姿です。私が先ほど話しましたように「セロテープ貸して」と言っても、「ダメ」って友達に言われるという、そういう関係からスタートする時に一つの積み重ねが仮説として言

えると思います。保育園は0歳から始まり、一対一の関係を2歳まででは非常に大事にしています。しかし、それでも2,3人、4,5人、5,6人とかかわりは次第に増えていきます。ですから幼稚園の3歳児よりも保育園の3歳児の方が自分を意識するとか、他者の存在と自己との関係とか意識の仕方は異なるわけです。そんなことを思うと、やはり一つの問題提起に対して自分の園はどうだろうということを考えてみることも大事ですね。幼児期の教育を考えると、幼稚園も保育園も同じことをしていると一般の人は見ていますが、実際中に入るとだいぶ違います。生活の中で、一人一人に応じながら、養護的かかわりないし教育を考えていくということみんなが同じようにスタートするまたは降園していく、最後、まとめの会があつてお当番さんご苦労様でしたと言って帰っていく、それはやっぱり幼稚園の姿です。その姿と長時間保育になり、8時間さらに延長する子も中にはいるわけです。都会ですと、6時半とか8時半とかありますし認定子ども園でも8時半のお子さんもいます。そうなると非常に幼児期における教育、学校教育をどこまでさすのかは、一体化ではもう対応できなくなってきます。ある一体化の施設では長時間の子ども達がたくさんいますが、時間帯を決めまして、学校教育を思われるところは「わくわくタイム」とか「リフレッシュタイム」とかと呼び、だんだん家庭生活に近づけるよう、5段階で分けています。先生のかかわり方も保育者としてのかかわり方、地域のおじさん・おばさんのかかわり方など、学校教育の教師というところからすこし子ども達の生活全体を見ているというかかわりと本当に家庭のお母さん・お父さんというかかわり方などに分けているのです。そうしながら保育者のかかわりや環境の構成を意識しながら、学校教育を支えていこうとしているのです。

その次に、小学校との連携についてです。平成22年の11月に文部科学省で出されました小学校との連携のあり方を幼保小の先生方やそれに関係した学識の先生方が参加して、取りまとめた報告書の中に「連携から接続へ」という言葉があります。当初、何を言っているのだろうと

よく訊かれて、説明をして伝わったという経緯があります。最近、接続を意識してカリキュラムを見直すようになったという報告を受け、取り組み始めました。主に行政では、市町村などを中心に都道府県も接続期の教育というものを少し意識して考えるようになりました。つまり幼児教育と小学校教育は、基本的には異なります。かたや遊びを通して学ぶ時代になり、かたや教科の学習を通して学んでいく時期ですから、当然異なるわけです。異なるということを意識した時に、どうしても指導法としてつないでいかなければないものもありますし、教育の内容として連続させていかなければならぬものもあります。のために連携を密にしていかないといけないものもあります。

そういう中で、3点整理をしてきました。これから幼児期の教育、今回お話しする幼児期の教育というのは、学校教育の視点での幼児期の教育という風に受け取ってください。  
①その時に大事なことはいわゆる学校教育のスタートとしての遊びの充実です。  
②芽生えを培うということを意識したときに、それがどう小学校教育、その後の教育に連続していくのかということを考えた、カリキュラム作りが必要ではないでしょうか。  
③家庭とともに歩むというのは幼児期の教育の一つの理想であり、そのことがすごく大事だと思います。幼稚園の教育目標などに、「家庭とともに歩んでいく」という言葉があります。それは子ども理解、子ども期というものを家庭も集団の保育施設も同じように考えて大事にしていこうということです。家庭の教育力が低下している中で、活性化することを少し考えていかないと、益々、集団の保育教育施設のいわゆる機会といいますか、子どもの健やかな成長というものが確保できません。また、家庭が子育ての第一に責任を担うということを教育基本上に掲げながら幼稚園や保育園の中でそれを逆に家庭が育つ芽を摘んでしまうことがあるので、考えなければならない。家庭とともに歩むということをもう一回考えてみましょうということです。学校教育のスタートとしての遊びの充実ということ、遊びはとても大事であるとずっと言われています。今始まったこ

とではありません。その時から2つ課題があります。「失われた育ちの機会ということ」と「遊びの中で学ぶということ」をもう一度考えてみましょう。「失われた育ちの機会」についてです。今の子ども達の生活の形状を考えてみると、非常に大変です。それはたぶん今の子ども達の問題ではないですね。私は授業をする際、どの様な話をするにしてもやったことがある、これはできるということを確認しながら話します。それでも学生からの答えは「えー」と思うことがいっぱいです。虫をつかめる子は少ないし、ドングリでどんな遊びをしたことがあるか尋ねると、すぐに返答がありません。「今度調べてきてね」というと、次の週みんなインターネットで調べてきたと言います。この間面白い話がありました。インターネットで調べると「ドングリを炒って食べられるとあったので、そういう経験をさせたい」と書いてきた学生がいました。でもドングリで遊ぶということを考えると、食べてみる前になんかやりようがあると思いますよね。ドングリが面白いっていう関心をもたせるために、食べなければいけないのかということですよね。学生達の中に体験がないということがわかりますね。それは、いまの子どもたちの責任でもないし、その子ども達を育てている両親の責任でもないし、ある意味では日本の抱えている課題なんだと思います。環境がもうそれを許してくれないということなんですね。少子化という中では、我慢しましょうと言っても、家庭の中で我慢することはほとんどありませんからね。恵まれた中で、子供部屋があり、自分の遊具とお兄ちゃんの遊具がまったく別々になっている子ども達には、我慢して使いましょう、交代して使いましょうなんて、なかなかできないでしょう。それは、何が悪いというよりも、そういう子ども達を受けてすべての幼児期に子ども達が心動かすような豊かな体験ということを保証していかなければいけないわけです。この時期の子ども達は、何かをさせて楽しかったというかもしれません。しかし、無理やり一方的な問題提起のような形で、やってごらんと言って、かかわるよりは、自ら生み出していくという遊びの中でいろんなことを体験し、心に残

る体験になっていくものなのですね。そう思うと遊びという、子ども達の生活の中で子どもが自発的な活動としてかかわっていく、そういう場面をたくさんつくっていくことが大事です。非常に体験不足だから、こころ動かすなんていっても、期待するような動かし方ではないわけです。そこにはこういう体験をこれまでしてきたから、もっとこんな風にしてみようというように、少し丁寧にかかわっていくことが大事なんだと思います。遊べない子ども達が多いんですって話が出た時に、遊ばない子もいるんじゃないですかという話をしています。遊べない子っていうのは、体験不足で遊べない。例えば、三歳児で、マンションずっと暮らしている子ども達の動きをみていると、階段を上るときも四つん這いになって登っていくという子どもの姿があるわけですね。先生方が個別なかかわりをしなければいけないわけですね。みんなで鬼遊びをしていても、追ったり追われたりするっていうのは、体力があつて楽しいですからね。体力がない子が無理やりそこで参加するとハアハア言いながらも先生がどこかに行ってしまうから余計不安になってしまいます。ある程度の体力があるからこそ、追ったり追われたりすることが楽しく感じられ、「先生明日もやりたいね」という言葉が出てくるのです。心に残る体験としてなっていて、その次の活動を生み出していくわけです。ある園に、足が細くて何をやるにしても違うようにして歩く子がいました。帰りお迎えに来た時にびっくりしました。それはお母さんがバギーに乗せてお帰りになっていたのです。そういう生活が、何でもないように思っているのです。そういう子ども達に対しては個別に配慮が必要です。担任の先生が追つたり追われたりしている時には、教頭先生がその子と手をつなぎながら庭を散策してました。このようにしながらその子が今夢中になれるを見つけられるようなことをしながらかかわっていくことが大切です。後半その園を行った時は、その子はサッカーボールを抱えて座っていました。座っているのはたまたま動いて疲れて座つていただけでした。とにかくサッカーをしたいという思いがもてるようになり、だいぶ

体力は付いてきたという話をしていました。このようにチーム保育という中で非常に配慮して見ていたわけです。私はもっと心配なのは、遊ばない子どもも思っています。楽しいと感じることができない、人と関わることをしない、みんなの前に来ると耳をふさいでしまう、お弁当の時間になると食べないって言ってふたをしめてしまう、いつの間にか静かなところで本を読んでいるという、今までの園生活の中で、遊びのスタイルをもてないと困るわけです。そういう子ども達の実態を考えていくとやはり一人一人の遊びの充実が自ら心を動かすという指導法の工夫が必要ではないかということです。もうひとつ、遊びの中で学ぶということをもう一回考えてみようではないかということです。最近いろんな研究会で学びという言葉が出てきます。遊びの中の学びという言葉が使われたのは平成7、8年のころです。生活科もようやく生活科として定着したころですね。ただ遊んでいるだけなのかというような批判を受ける中で、小学校の生活科の中で活動を意味づけてきたということがあります。それと連動するように幼稚園の中でもただ遊んでいるんではない、子ども達は遊びの中でいろんなことを学んでいるという視点で、子ども達の学びに焦点を当てて次の環境を構成していくことで遊びの中で学びという、遊びの中で子どもたちが経験していることとか、遊びの中で子どもたちが学んでいることを大事にしていくことが大切です。最近評価という言葉がよく聞かれるようになりました。するとなおさらのこと学びを意識した形で、保育が展開されていくのです。けれどもそこには一つ落とし穴があると思っています。あんまりにも意識しすぎると遊びでなくなるといいますか、先生も子どもも今日はこれをやらなければならないという、非常にそこに追い込まれていくような遊びになってしまいます。子どもがそれが終わった後、「先生遊んできてい？」と言うようになってしまふということです。それは多分、同じ「遊び」という言葉を使っていても、小学校以上の遊びと幼稚園の遊びとは違うし、三歳、四歳、五歳という遊びの姿は違います。五歳は非常に微妙です。今の時期遊んでい

る姿と5歳後半の遊ぶ姿は活動という言葉の方が適切だなって思うくらいに違います。今日も宇宙船の遊びをどう思うかという議論をしていましたが、五歳の前半、三歳、四歳の遊びっていうのは目的が遊ぶことにある訳で、遊びを通してなにを獲得していくか、何を経験していくのか、何を学んでいくのかということを子どもは全く考えていません。先生自身も予想される活動はもつわけですが、必ずしもそれが予想通りいくわけではありません。指導計画案は仮説であるという言い方をしますが、まさにそこを基軸にしながら、子どもの活動の様子を見ながら柔軟に対応していくことが遊びの指導です。非常にその先が見えづらいですが、そこで経験していることを先生は期待しながら見ていくことが大事だと思います。今日の五歳の遊びであれば、友達に自分の思いを伝えたり、ねらいや内容を言葉で伝えたり、思いを聞き入れるということが経験できることが大切であり、必ずしもそこで宇宙船ごっこをするというが必要なことではないということです。五歳ももう少し進んでいくと、昨日やったことを次の日に続けながら、自分の活動の目的に向かうことを求めていきます。向かうようになるとそれなりの環境構成を考えて、思いが実現できるようにしていかなければいけません。三歳、四歳の遊びになると場を提供するわけですが、何が生まれてくるかというのは、子どもに任せなければならない。出てきたものに対して先生がイメージを共有しながら、イメージを発展させていくようになります。遊びの中の学びという見方は大事で、子どもたちが何を経験してきたかとか、そこで学んでいることはどういうことか等は、記録の中にしっかりと残しながら、その次の指導案をたてるに生かしていくことが大事です。そこから子ども達の遊びを見てしまうと一方的な働きかけになり、それ以外の遊びに取り組む、主体的な子どもの取り組みが失われてしまうような気がします。私は遊びの中の学びという言葉を使いますが、常に子どもが経験していることを大事にしながら遊びの指導のあり方をふまえていかないといけない訳です。学校教育のスタートというのは、遊びの中でいろいろな体験

をして、人間関係を調整するということを獲得してきたり、自然体験の中でいろいろな自然のものに関わるおもしろさとか不思議さとかの体験をしたり、いろんな運動の遊びを楽しんできたり、なにか挑戦することがおもしろいと思えるようになつたりと、様々な体験がその後の学校段階で花開いていきます。今花開くというよりはそこで体験したことが花開いていきます。だから幼児期は、学校教育法の目的の中に、「幼稚園は義務教育のその後の基礎を培う」ものとして、幼児を保育し幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とすると言われています。義務教育のその後の基礎を培うというのは今まで行ってきた遊びを通しての教育が充実することが、そのことにつながっているというような見方をするわけです。子ども達が学んでいることを見ることによって、遊びの質がより豊かになっていくということが大事なのかなと思います。

その時に3歳からは学校教育としてみなしていきましょうというのが、これからの方針として出ています。3歳児といつてもはじめて集団に入ってくる3歳児と、0歳1歳2歳という集団で生活してきた3歳児との違いがあります。そのためカリキュラムの違いはあると思います。協同性の育ちということとなると5歳になって、人とかかわって学ぶことが楽しいということで援助ということが問題になってきます。しかし、学級の規模でかなり違ってきます。一つのデータとしてですが、30人前後の学級規模と、15、16人前後の学級規模では、個別に対する援助の仕方も違うし、一概に5歳とか3歳とか4歳というようなことにはならないと思います。そういう意味で、我が園の3歳ってどういう3歳で、我が園の4歳、5歳はどういう育ち方をしているか、我が園の子ども達の育ちをしっかりと見ていかないければ見えないと思います。今日の発表の中にも環境の構成と教師のかかわりを分けて、話しておりましたけど、人やものとのかかわりが豊かになっていく、同じ活動をしていても環境の構成の仕方や教師のかかわり方によって、子ども達が経験する内容が異なっています。「いいも掘りでおいもを分けっこしましよう。

一人3個にしましょう」という時に、袋いっぱいになる子と、同じ3個でも袋の半分くらいの子と両方いるわけです。あんまり量を意識しないと少なくなることもあるし、意識すると満杯になる大きな3個取ってきます。その時先生の方から、だれちゃんが多いよとか少ないよとか先に投げかけるよりも、気が付いている子の言葉を借りながら、「ほんと、大きいね」「あれ、だれちゃんのずいぶん小さいね」などと言いながら「もう一回袋から出してちょっと数えてみるね」もう一回数えたら「同じなのにね」と投げかけることができます。子どもは多いからなどと言います。そこで「ほんとだね」などと子どもに合わせながらみんな同じにするにはどうしたらいいというような投げ返しをすることができるわけです。投げ返しした時にある実践の報告の中には大きいお山と小さいお山にわけよう、大きいお山のおいもと小さいお山のおいもに分けようなど、子どもなりに解決策を出します。実際分け始めると、「これはどっち」と先生に聞いてくる子がいます。先生が答えてしまったり、秤を持ってきてはかったりすることも可能かもしれません、「困ったね、先生もわからないね」と投げ返すと、子どもの方から「中くらいの山にしよう」と動き始めます。大中小と分けて、そこから一個ずつ取るという実践をしたところ、半日かかったという報告を聞きました。まさにその教師のかかわり方一つで子どもが経験していることが変わってくるわけです。そうなると教師のかかわりとして、ものや人ののかかわりを豊かにするということを考えて教育環境を工夫しなければならない。私たちが遊びを通して育てていると思っていることが育ちにつながっているということを見直すことが大事なのかということです。次に、芽生えを培う教育の展開についてです。私たちは小学校入学前の子ども達の教育に携わっています。子ども達は集団の中で、新しい世界を生み出していく時に、人ともかかわるし、自分の思ったことも表現できるし、人の考えを取り入れながら自分の世界を豊かにしていくことができるようになります。それはすごく先生の支えが必要です。また適切な場というのがあるんだ

と思います。そう考えると協同的な育ちをいかに支えるかということは、まさにそのスタートの段階になるわけなのです。でも、幼稚園保育園の5歳の指導計画をみると必ず、友達と共に目的をもって相談しながら活動を進めるという言葉が2学期3学期には必ず入ってくるわけです。それを見た時に小学校の先生はすごいって思う先生もいれば、生活科と同じですねとおっしゃる先生もいて、それぞれの受け止めがあり、本当につながっているのかという問い合わせになります。幼稚園保育園も相談しながら進めるというのは、先生が陰ながら交通整理をしたり、整理をしたりしています。今日の5歳の話し合いの場面でもありました。困ったことの話し合いの時に、こうだったんだと子どもの言葉をもう一回整理をして、子どもに返していました。それがあつて初めて、相談が成り立ちます。生活科の中で相談しながら進める場合、グループごとにまかせ、みんなの意見を聞くように、勝手に決めないようになど了解事項を設けることで、ある程度相談になると思います。幼稚園や保育園でもできないことはないと思います。「勝手に決めないでね」とか「みんなの意見聞くんだよ」とかいうと「はーい、わかりました」って言いながらも、じゃあグループの名前を決めてごらんと言うと、声の強い子、大きい声に周りがそのまま合わせてしまったり、本当はいやなんだけどということが出てきてしまったりします。それも一つの経験だと思うから子どもにさせるわけです。先生がその中に入つてだれさんはそう思うのね。じゃあその解決はどうしたらいい? ジャンケンがいいとか何とかがいいとか言います。しかし、ジャンケンで決める場合には本当にそれでいいんだね? と一人一人に聞きながらやっぱりみんなで決めていくそのステップを支えていくわけです。そういうことを先生が陰ながらやっている、さりげなく関わっているのです。芽生えを培うという意味で就学前の幼稚園保育園ではどういうことを支えとして、今回の自分づくりの姿を支えるという視点からそこを明らかにしようすることは、大変意味があるかなと思います。少しきめ細かく、さりげなく支えている、保育って信頼とい

われますけれども、体がまず動いてしまうんです。困ってるというとさっと動いてこっちだと知らせるのです。それが多分小学校には伝わっていないかいし、若い先生、体験が不足している学生にはなかなか伝わらない。保育というものを教師がかわりっていうものを細かにきちんと整理しながら、だから芽生えを培うっていうのがすごく大事なんだということをしていると小学校につながっていくことをつないでいかなければいけないと思います。この園では小学校からくる先生がいらっしゃるそうです。やはり幼小両側から見て、両側を知りながらその言葉を使っていくことが、学校教育の始まりとしては大事であると思います。幼児教育の独立性を守っていくのであれば、なおさらのこと言葉がそれの中へ閉じていると使われていかないのではないかと思います。そんなことを考えた時に、もう一つの試みとしては接続期の教育ということを、幼児期から小学校に接続する。スタートカリキュラムといった取り組みがなされてきました。私がおります大学で幼保小が集まって考えています。幼保は公立、私立両方の代表の人が出て、接続のカリキュラムというのとスタートのカリキュラムというのをつくっています。昨年度は大変違うということがわかりました。幼保も違いますし、公私とも違います。それで、どこに基軸を合わせたらよいのかが分からず、一応人とかわる力ということと、学びの芽生えということと、生活習慣ということをつなげていく三つの柱として、それに関わる自分の園の指導計画の言葉、子どもの姿を出し合いました。そうしますと、同じ内容にかかわって、学びの芽生えとか人とかわる力の中で、園で5歳なら5歳の後半で大事にしていることを出し合っていくと、だいぶ違うんだなと、幼児期の教育の中でも違うなと思いました。違うということが接続期の中身を議論する内容になっていると思います。今年はそれを実践しながら整備します。そして三年がかりで作りましょうと言っていますが、それもやはり背景には両方向の一体化ということが出てきます。その時に芽生えを培うという、ようやくみんなと一緒に学べるようになるのです。先ほど、自覚的

な学びといいましたけでも、これは学びの芽生えを培うことから、自覚的な学びへということになっていますが、これは平成22年11月に文科省でだされた連携から接続へという、連携の成果を接続にカリキュラム作りに生かしていくという中に入っている文言なのです。幼児期の教育は夢中になって遊ぶ、その結果いろんなことを体験し学んでいく。それが学びの芽生えなのです。子どもが何を学ぶのかということを自覚して活動に取り組めるようになるということが大事で、5歳から1年生2年生3年生というその生活科の次の教科になっていく、そういう長いスパンで、無自覚的な学びから自覚的な学びへ移行していきます。そのことを指させていきましょうということが学びの芽生えを培うことから自覚的な学びへなっていきます。その時、指導法としては一人一人に応じるというか、学習といつてもまだまだ体を動かしながら学んでいくことが多いです。指導法としては幼児期から児童期へつなげるものもあるし、そういうた、官に何を伝えていくかということは、これは管理職のすることです。

最後に、「家庭とともに」ということは、学校教育の始まりとしての幼児期の教育ということを家庭でどれだけ理解してもらっているのかということです。そのことが将来の学びの基盤になっていくことを案外考えもしないで預かってほしいという、そこだけで動いてしまうことが多いと思います。そういう意味で、私たちも力不足であるし、発信の仕方もこれまで十分できていないことを反省しなければいけない。家庭・地域社会・幼稚園や保育所という、いわゆる集団で生活・教育をする場の三者がお互いに支え合わないと成立しません。家庭が大事といいながらも、家庭では偏った経験になっています。個々の家庭の中で多様な価値観の中で子育てしていますから、個人差があるのです。そういう個人差を受け止めながら、家庭とともに育てるという関係をつくっていく中で、幼稚園や保育園の側で体制を整えなければならないと思います。また、情報発信をしながら、家庭とともにということをしっかりと伝えていかないと問題かなと思います。特に認定こども園で取り組んで

いる事例など見ますと、幼稚園の機能、保育園の機能、地域の子育て支援を行っていくことが役割に取り組んでいくわけです。でも実際にはそれに対する財政的は基盤というのは今の政府の中にはないので、知恵をいろいろ出し合うわけです。幼稚園から認定こども園になったところの取り組みをお話します。先生方は入ってくる子ども達をいかにその生活に慣れさせると同時に幼児の教育を守るかが大変です。地域の子育て支援っていうのも場は提供できます。しかし、人がなかなかそれに当てられないのです。そのため主任の先生や園長先生が苦労なさっていました。段々に卒業生の保護者が入ってくるようになり、子育ての交流をする場が生まれてきたという報告です。それがNPO法人になり、幼稚園から離れたところに簡単な建物をつくって、その運営を卒業生の保護者に任せ、そこを手づくりでお弁当袋やスマックなどを売ったり、赤ちゃんマッサージの講習の場にし、いろいろなことが行われていました。それは皆さん気が恵を出し合いながら地域の人達がそこに参加し、できてきました。1、2年の間に、過疎の進んでいった地域ですが、遠くから子どもを連れてくるようになってきました。大変うまくいった事例です。まずは、園の保育が信頼されること、修了した保護者の方がその園に行ってよかつたというそういう思いをもてるよう園長先生や先生が頑張っています。自分の子どもを育ててもらったからという気持ちになると思うのです。結構今どきのお母さん達は、すごいパワフルでアイディアがあり、情報のネットワークをもち、それはそれなりに宣伝する力をもっています。幼稚園と保護者がもっと交流する場をもちながら、家庭とともにという関係をいかにつくっていくかが大切です。その中で、やっぱり信頼され、愛される園づくりが求められます。自分達のやっている日々の保育とか園運営を第三者がどういう目で見ているのかを常に意識しながら、同じ気持ちをもった仲間を増やしていくことも必要になってくるのかと思います。

(文責:林博之、藤田恵里加)